

新井白石の西学観

坂本 頼之

はじめに

江戸期日本に於ける儒学と西学との出会いのなかで、後世に大きな影響を与えたとされるのが新井白石（1657-1725）とシドッチ（1678-1715）¹の「出会い」である。その「出会い」は、鎖国下の日本に潜入し捕らえられたローマ法王庁の使節シドッチを、六代将軍徳川家宣の命により新井白石が取り調べるといふ形で行われた。その際に得たキリスト教の教義や西洋諸国の経済・社会・文化についての多岐にわたる情報を、新井白石は『西洋紀聞』『采覧異言』といった書籍にまとめた。このうち『采覧異言』は海外の地理や情報を漢文（一部外国語はカナ表記）で著し、『西洋紀聞』はシドッチとの尋問の様子を描写しつつ海外事情と地理、そしてキリスト教教義の解説と批判を漢字かな混じり文（一部外国語はカナ表記）で著すというように、その内容と表記は異なっている²。

『采覧異言』は多数の写本が流布し、海外列強からの防衛が意識され始めた「江戸時代後期の識者の必読書」（宮崎道生著『新井白石の洋学と海外知識』（吉川弘文館 1973年3月）第六章 采覧異言の流布と史的役割p.182）とされ、一方で『西洋紀聞』はその内容がキリスト教の教義に触れることが多いためか、新井家に秘匿され一部の学者の間でひそかに伝写されるという形で流布した。しかし寛政五年（1793）に幕府の命により献上され、また様々な学者の伝写を経て水戸学の会沢正志斎などに伝わり影響を与えたとされる³。

その『西洋紀聞』の中で白石は簡明な西洋学術に関する評価を残した。それがシドッチからキリスト教の教義を聞いたのちに記される

「凡そ、其人博聞強記にして、彼方多学の人と聞えて、天文・地理の事に至ては、企及ぶべしとも覺えず。其教法を説くに至ては、一言の道にちかき所もあらず。智愚たちまちに地を易へて、二人の言を聞くに似たり。ここに知りぬ、彼方の学のごときは、ただ其形と器とに精しき事を。所謂形而下なるもののみを知りて、形而上なるものはいまだあづかり聞かず。さらば天地のごときも、これを造るものありといふ事、怪しむにはたらず」（『西洋紀聞』上巻p.17-19）

4

という一文である。この白石による「形而上」「形而下」の区分により、西洋学術はキリスト教と切り離され、後の日本における西学の勃興の先駆けとなり、またこの評価が後の「和魂洋才」「東洋道德、西洋芸術」を準備したとするのが先行研究の評価である。

「西洋学術文化観の源流となつたことであるが、これまた既に先学によつてはやく指摘された通り、「東洋道德、西洋芸（技）術」的観念の先駆けとなつたものであり、和魂洋才の精神が本書において逸早く表明されたと見ることができるのである」（宮崎道生著『新井白石の洋学と海外知識』（吉川弘文館 1973年3月）の第五章「西洋紀聞の思想史的役割」p.165）

「白石とシドチとの出会いによって長い間のヨーロッパ観の基礎がきずかれ、「和魂洋才」「東洋道徳、西洋藝術」の基礎的パターンが出来上がったのである」(源了圓著『徳川合理思想の系譜』(中央公論社 1972年6月) p.63)

「文化交渉史の次元では、白石のこの態度は、後に日本人による西洋文化の導入のしかたを特徴づける「和魂洋才」的な態度を先駆けているものとして注目に値する」(宮崎道生編『新井白石の現代的考察』所収のアレッサンドロ・ヴァロータ氏「新井白石の『西洋紀聞』について」(吉川弘文館 1985年6月) p.263)

「西洋の学術を「形而下」と規定し、その価値を認めただけであるが、この事は西洋学をそれまで邪教視されたキリスト教との結びつきから解放する結果となったと見る事が出来るので、洋学勃興の思想的準備をしたという見解がとられているほか、禁教政策と自然科学および技術の移入との使い分けを可能にしたとか、洋学の実学的な摂取のあり方を規定した、などの意見も提出されている」(宮崎道生校注の東洋文庫『新訂 西洋紀聞』(平凡社 1968年4月)の宮崎氏の解説の「五 思想史的役割」p.453)

このように白石とシドッチの「出会い」は思想史的に重要な足跡として、豊富に研究が行われていると言って良いだろう。しかしながら以上に挙げた先行研究を見ていくといくつか疑問が生じる。まず白石の西学観を表した一文についてである。「所謂形而下なるもののみを知りて、形而上なるものはいまだあづかり聞かず」と白石が述べた時、その「形而上」「形而下」とは従来先行研究が指摘してきたような「形而上」＝「キリスト教」「形而下」＝「西洋学術」といった意味合いで捉えるべきなのだろうか？⁵

また諸先行研究のような「形而上」「形而下」の理解が成り立つとして、その「西洋の学術」は本来「形而上」「形而下」という対で捉えるべきものなのだろうか？そしてそれは果たして分けられるものなのであろうか？

そこで本稿では『西洋紀聞』における白石の「形而上」「形而下」の西学観について詳細に検討することで、従来の先行研究で述べられてきた「和魂洋才」的先駆けとして新井白石の西学観を捉えることが妥当なものであるのかを考察してみたいと思う。

一、シドッチ事件のあらまし

ここでまず理解の助けとしてシドッチ事件のあらましについて述べておく。ローマ法王庁より派遣されたシドッチが屋久島に潜入し、在地の農民に発見されたのが宝永五年(1708)のことであり、その後江戸に護送されたシドッチを新井白石がその翌年の十一月から十二月にかけて四回にわたって尋問した⁶。その際、白石は尋問についての覚書を残しており、十二月にはシドッチの尋問の内容と大意、そしてシドッチ処分についての白石の意見書を「天主教大意」「羅馬人処置献議」としてまとめ、さらには報告書二冊を間部詮房を通して家宣へと提出している。その後シドッチ尋問の顛末、シドッチから聞き出した海外事情・地理などの情報、キリスト教についての解説と批判などをまとめ、『西洋紀聞』を執筆したと考えられている⁷。

白石のシドッチ処分の意見は、上策はシドッチを強制帰国させること、中策はシドッチをこのまま囚人として拘禁すること、下策はシドッチを処刑することであり、白石が望んだのは恐らくシドッチを帰国させることであつたと推測されている⁸。しかしその年末に幕府が採用したのは、シドッチを拘禁するという中策であつた。ただし世話代として毎年金二十五両三分、銀三匁が支給されており、その拘禁が厳しいものではなかったことがうかがわれる。

その緩やかな拘禁は、四年後の正徳三年(1713)に切支丹屋敷でシドッチの世話をしていた長助・

はる夫婦がシドッチから洗礼を受けたことを自首してきたことにより、大きく変化することとなった。結局長助・はる夫婦は拷問を受け死去、シドッチは罪を糺されて敵囚の身となり、正徳四年(1714)の十月二十一日に四十七歳で死去した⁹。これら関連する事柄を表にすると以下のようなになる¹⁰。

シドッチ事件関連年表

宝永五年 (1708)

- 8月28日 阿波の漁師市兵衛等が大隅国屋久島の沖合で大きな帆船から水を求められる
- 8月29日 屋久島恋泊村の百姓藤兵衛が炭焼きの際にシドッチと遭遇、村に連れ帰る
- 9月13日 領主の島津家が長崎奉行に届け出て、その命により長崎にシドッチを護送
- 11月9日 長崎到着。取り調べを開始するも、和蘭通詞も在地のオランダ人・中国人も彼の言語が理解できなかった
- 11月19日 ラテン語を学んだオランダ館員によりやっと尋問が行われ、シドッチ潜入の事情が明らかになった
- 11月26日 長崎奉行が江戸に報告
- 12月6日 新井白石が江戸城西丸で世嗣である家宣よりシドッチ事件のことを伝え聞く

宝永六年 (1709)

- 1月10日 五代将軍綱吉が死去し、世嗣だった家宣が六代将軍となる
- 9月25日 命により長崎よりシドッチを江戸に護送
- 11月1日 シドッチ江戸到着。小日向の切支丹屋敷に拘禁
- 11月9日 家宣より白石にシドッチ尋問の命が下される
- 11月22日 白石が切支丹屋敷で最初のシドッチ尋問を行う
- 11月25日 二回目の尋問
- 11月30日 三回目の尋問。この時白石は奉行の随行立ち会いを断っている
- 12月4日 四回目の尋問
- 12月9日 白石「羅馬人処置献議」でシドッチの処置についての意見を上書する
- 12月29日 幕府の命によりシドッチは切支丹屋敷に入牢

正徳三年 (1713)

- 11月 シドッチと同じ切支丹屋敷で奴婢となっていた長助・はる夫婦がシドッチより洗礼を受けたことを自首

正徳四年 (1714)

- 3月 オランダ商館長ホールンが参府した際、その通詞に長助・はる夫婦の洗礼の件でシドッチの罪を糺させ、シドッチを詰牢に移送
- 10月7日 長助病死す
- 10月21日 シドッチ死去

正徳五年 (1715)

- 2月中旬 『西洋紀聞』初稿本なる

二、『西洋紀聞』における白石の西学観

「はじめに」で述べたように、白石は『西洋紀聞』内に簡明な西洋学術に関する評価を残している。繰り返しになるが再びあげると

「凡そ、其人博聞強記にして、彼方多学の人と聞えて、天文・地理の事に至ては、企及ぶべしとも覚えぬ。其教法を説くに至ては、一言の道にちかき所もあらず。智愚たちまちに地を易へて、二人の言を聞くに似たり。ここに知りぬ、彼方の学のごときは、ただ其形と器とに精しき事を。所謂形而下なるもののみを知りて、形而上なるものはいまだあづかり聞かず。さらば天地のごときも、これを造るものありといふ事、怪しむにはたらず」（前述）

である。この発言はシドッチより「その教の事ども説き尽しぬ」（『西洋紀聞』上巻 p.17）とキリスト教の教義について聴取した四回目の尋問を終えての発言であり、また数々の尋問を経て見聞したシドッチの学識の高さを踏まえてのものである。

白石が『西洋紀聞』において、キリスト教についてどのように考え、批判したかは大別すると四つに分けられる。

その一はキリスト教では神が万物を造ったというが、では神は何物によって造られたのか。もし神が自ら生じたとするならば天地が自ら成ることも認めざるを得ないはずであるという神の存在と万物の創造の問題である。

その二はアダムとイブの原罪とイエスによるその贖罪、天国と地獄の存在といったキリスト教の教義の非論理性を批判すると共に、旧約聖書のノアやモーゼの話に見られる無慈悲で残酷な神の側面について、全能で慈悲深い神というイメージとの不一致を批判する。

その三は十戒による一夫一婦制が、かえって欧州諸国で王位継承の争乱を生み出しているのではないかとする批判である。

そしてその四がキリスト教では神を大君大父とするが、それは我が父の外に大父が、我が君の他に大君がいて、我が君父よりも大君大父を尊いとする考え方であり、やがては君をなみし父をなみするに至る。しかし儒教では上帝に対する礼は天子のみのものであり、臣は君をもって天となし、子は父をもって、妻は夫をもって天となすのであって尊卑の分位を乱すことがない。つまりキリスト教倫理が儒教倫理、或いは当時の日本社会の倫理を破壊する危険性についての批判である¹¹。

これらのキリスト教批判は、先行研究の指摘にあるようにさまで新しいものではない¹²。しかし白石は実際にシドッチとの論争を経た上で、論理立ててその欠陥についているという意義はある。

また一方で、シドッチの学識についての具体的な事例として『西洋紀聞』では

「初見の日に、坐久しくして、日すでに傾きたれば、某奉行の人にむかひて、「時は、何時にか候はんずらむ」と問いしに、「此ほとりには、時うつ鐘もなくて」と申されしに、彼人頭をめぐらして、日のある所を見て、地上にありしおのが影を見て、其指を屈してかぞふる事ありて、「我国の法にしては、某年某月某日の某時の某刻にて候」といひき」（『西洋紀聞』上巻 p.17）

と、時刻を影の長さ、それも自らの指を用いて直角三角形をつくり、その斜辺を「勾股の法」（『西洋紀聞』上巻 p.17 直角三角形の直角をはさんだ長い辺と短い辺を使った和算の計算法。『西洋紀聞』p.17の欄外の注に詳しい）で計算して測ってみせたことや、また世界地図の文字が小さく読み取れなかった時、その地図の縮尺からコンパスを用いてたちどころに各地を指し示してみせたこと（『西洋紀聞』上巻 p.17-18）が挙げられている。実際にこれらのことを見せつけられた白石は「其

人博聞強記にして、彼方多学の人と聞えて、天文・地理の事に至ては、企及ぶべしとも覚えず」（前
述）と脱帽している。

そしてこれらのキリスト教観・西学観を前にして白石が下した評が

「ここに知りぬ、彼方の学のごときは、ただ其形と器とに精しき事を。所謂形而下なるもの
のみを知りて、形而上なるものはいまだあづかり聞かず」（『西洋紀聞』 p.17）

ということになる。

ここでまず考えてみたいのは、白石が「所謂」「形而上」「形而下」と述べるとき、それは何を想
定しているのかである。「形而下」については『易経』繫辞上の

「形而上者、謂之道。形而下者、謂之器（形よりして上の者、之を道と謂ふ。形よりして下の
者、之を器と謂ふ）」（『易経』繫辞上）

が想定されていると考えられる。『西洋紀聞』においても「ここに知りぬ、彼方の学のごときは、た
だ其形と器とに精しき事を」として、「形」「器」が配されているからである。問題は「形而上」の
方である。

白石が「形而上なるものはいまだあづかり聞かず」と述べたとき、恐らく漢文に戻せば「未與聞」
となる「與聞」¹³の主語は、やはり「形而下なるもののみを知る」と同じく「彼方の学」となるは
ずである。つまりこの一文を試みに訳せば「西洋の学問は、形よりして上なるものについては、ま
だ関わり知ったことがない」となるだろう。

ところで白石は西洋の学問に今日我々が「形而上学」と訳す学問が存在していることを知っている。
『西洋紀聞』と同じく、白石がシドッチ尋問の内容を記した「ヨハンバッティスタ物語」にはキ
リスト教宣教師が学ぶべき教科の一つとして「メタヒイジカ」（「ヨハンバッティスタ物語」東洋文
庫『新訂 西洋紀聞』（p.227））を挙げている¹⁴。しかしその内容について白石がどの程度シドッチ
から聞き出したか、またシドッチがどの程度「メタヒイジカ」に通暁していたのかは定かではない。
そして白石にとって「メタヒイジカ」は「メタヒイジカ」であって、今日の我々のように直ちに「形
而上」という言葉とは結びつけて考えられないものであるのは当然だろう。むしろ白石が「形而上」
という言葉で結びつけるのは、「形而上者謂之道」「形而下者謂之器」という『易経』の対表現を念
頭に「道」となるはずである¹⁵。木下順庵に学んだ朱子学者白石にとって「道」とは「理」であろ
う。

先ほど試みに訳した文の「形而上」を「道」（理）と入れ替えて訳せば「西洋の学問は「道」（理）
のことについては、まだ関わり知ったことがない」となる。つまりここで白石が「形而上」という
言葉で指し示す範囲は非常に限定されたもの、所謂朱子学的なものを指していると考えらるべきでは
ないだろうか。そのように理解してこそ、この文の直後に繋がる一文「さらば天地のごときも、こ
れを造るものありといふ事、怪しむにはたらず」との関係が明らかになる¹⁶。朱子学において天地
を創造するものは「理」の働きによるものであるとされ、白石自身もその前提に立っている。

「大極、両儀を生ず。大極すなわち理也」（『西洋紀聞』下巻 p.78）

これを否定し、造物主による天地創造を説くシドッチのキリスト教義を聞いた白石の評が「形而上
なるものはいまだあづかり聞かず。さらば天地のごときも、これを造るものありといふ事、怪しむ
にはたらず」となるのであって、それは「西洋の学問は「道」（理）についてまた関わり知ったこと

がないのだ。だから天や地といったものであっても、これを造った者が存在するなどと言い出すことも、怪しむには足りないことだ」となる。この内容は先に挙げた白石のキリスト教批判のその一である神の存在と万物の創造の問題に対する批判と軌を一にしており、その点からも整合性がとれている。

そうだとすると従来の研究が「和魂洋才」の先駆けであり、キリスト教的な「形而上」と、西洋学術的な「形而下」との分離と捉えられていた白石の評の全体像は

「私は理解した。西洋の学問は（『易経』に言うところの）物質や技術についてだけ理解するだけで、（『易経』に言うところの）「道」（理）についてはまだ関わり知ったことはないのだ。だから天や地といったものであっても、これを造った者が存在するなどと言い出すことも、怪しむには足りないことだ」

となる。であるならば、これは「道」や「理」といった万物を生み出し存在を規定する生成論における朱子学的思考の、キリスト教的教義への優越を説いたものであり、言い換えるならば朱子学的世界構造の延長上（或いは朱子学的普遍世界観の中）に、西洋の学を「精しい」という優劣の問題として組み込んだものといえる。つまりこれは西洋学術の区分や分断ではなく、朱子学的思考の枠組みへの西洋学術の組み込みと考えるべきなのではないだろうか¹⁷。

加藤周一氏は日本思想大系『新井白石』（岩波書店 1979年7月）「解説」の「新井白石の世界」に

「彼が朱子学の裡に見出したのは、中国の、またもちろん日本の、文化の特殊性を超える普遍性であり、つまるところ世界秩序の合理性に対する信頼であった」（p.539）

と述べている。また玉懸博之氏は相良亨・松本三之介・源了圓編『江戸の思想家達』（研究社出版 1979年11月）の「新井白石 —その思想的営為と基本思惟様式—」において白石の思惟様式に関して

「白石の思惟様式に関し、二つの重要な事実が指摘される。第一は、白石が、世界に生起する諸々の現象の根底に普遍的な—時間・空間の差異を超えて妥当する—理ないし道の存することを確信していたことである」（p.347）

「第二は、普遍的な理ないし道が現実の場面で実現される場合、時間・空間の制約を受けて—それぞれの場面の時間的・空間的状况に応じて異なった形で—実現されると白石がみなし、しかも理ないし道の実現される場面への鋭い洞察を彼が持っていることである」（p.348）

の二つをあげて「この両者が共存・結合して白石の基本的思惟様式を成立せしめていたのである」（p.357）とする。

これらの普遍性の存在の確信という思惟様式が、白石の思惟様式として正しい見解だとするならば、先の新井白石の「ここに知りぬ、彼方の学のごときは、ただ其形と器とに精しき事を。所謂形而下なるもののみを知りて、形而上なるものはいまだあづかり聞かず」という西学評を見た場合、その評は白石が確信し前提としている朱子学の普遍性の延長上への西洋学術の位置づけと、時間的・空間的に異なった形であっても実現される現象の承認と見る事が出来ると思われる¹⁸。

三、「自然哲学」における形而上と形而下

ではそもそも西洋の学術はキリスト教的な非合理的なものと、自然科学に代表される合理的なもの、「形而上」と「形而下」に分離し得るもので、その分離が日本への西洋自然科学の導入の助けとなったのであろうか？

ちょうど白石とシドッチが「出会った」時代と同じ頃、1500年から1700年ごろまでの間に、ヨーロッパで「科学革命」¹⁹が起こり、現代に生きる私たちが「自然科学」の名で呼ぶ知識体系がこの時代に集中して登場した。ケプラー（1571-1630）ガリレオ（1564-1642）デカルト（1596-1650）、そしてニュートン（1643-1727）という、専門家でなくても法則や原理の発見者としてその名を知る人々の、偉大な業績が連続して発表されたのがこの時代である。しかしこの「自然科学」理解には重大な問題が隠されている。

「近代から現代への自然科学の歴史的な発展過程のなかで、人びとは、十七世紀の登場人物たちの主張や考え方のなかから、ある一つの様相だけをとり出し、それ以外のものをすべて捨て去った結果をもって、近代自然科学と呼んでいるのだ、と言うのが正しかろう」（村上陽一郎著『近代科学と聖俗革命〈新版〉』（新曜社 2002年7月） p.16

つまり近代の西洋学術を現代的視点で切り取った上で「自然科学」と呼称することは、当時の学問の姿を見誤るおそれがあるということだろう。そもそも当時の人々が自分たちの学問をどの様に考えていたのかというと、それは我々のよく知るニュートンの名著から明らかだとJ・H・ブルック氏は指摘する

「惑星軌道を重力理論で解明した彼の著書の表題は『自然哲学の数学的原理』（1687）であって、『自然科学の数学的原理』ではなかった。十七世紀の科学の徒は自然哲学者と自称したのであり、専門科学ではなく、むしろ広範な研究主題を論じる知的伝統に属していた。ニュートン自身も神の属性や神と自然界の関係を探究することが自然哲学の根幹であると述べている」（J・H・ブルック著・田中靖夫訳『科学と宗教 合理的自然観のパラドクス』（工作舎 2005年12月） p.14

彼らは「科学者」ではなく「自然哲学者」であった。「自然哲学」についてはローレンス・M・プリンチペ氏が以下のようなまとめをしている。

「自然哲学はこんにちのわたしたちが「科学」と呼びならわしているものに密接に関係していますが、その範囲と意図はもっと広大です。中世と「科学革命」期の自然哲学者は—現代の科学者と同様に—自然界を研究しましたが、神学や形而上学を含んだもっと広い視野をもってでした。神、人間、自然という三つの構成要素は決してたがいに切り離されてはいませんでした」（ローレンス・M・プリンチペ著・菅谷暁・山田俊弘訳『科学革命』（丸善出版 2014年8月） p.39-40

このような「自然哲学」の内部では、どのように神学と科学が切り離されずに結びついていたのかというと、それは部分的には「二つの書物」という考え方にもとづいていたとプリンチペ氏は述べる。

「この考え方の示すところは、神は二通りの方法で人間の前に姿を現わすというものでした—一つは聖なる記述者たちに靈感を与えて「聖書」を書かせることによって、もう一つは「自然という書物」である世界を創造することによってです。わたしたちのまわりの世界は、聖書に劣らず、読まれることを目的とした神のメッセージです。鋭敏な読者は被造物を研究することによって、創造主について多くを学ぶことができます」〈前述書 p.54-55〉

「自然という書物」を通して創造主について学ぶ、これが今日私たちが自然科学とよんでいる学問分野の基礎だとするならば、本来自然科学と神学は分離できるようなものではない。実際にデカルトは

「神は最初に物質を創造された時、物質の諸部分をさまざまに運動せしめられたが、今でも始めの創造の時とまったく同じ仕方と同じ比例で全物質を保持しておられるのだということだけからでも、神は全物質のうちにつねに同じだけの運動を保持しておられるのだと信じるのが、もっとも合理的なことだということになる」(世界の大思想 21『デカルト』梶田啓三郎訳『哲学の原理』(河出書房 1981年5月) p.276)

このように運動保存、つまり慣性の法則を神の手に帰しながら、「もっとも合理的なこと」と考えている。またニュートンは天地創造以後も神が活動している証拠として恒星の安定性を用いた。恒星同士に引力が働くならば、そのうち恒星同士が互いに衝突するが、それがなぜ避けられているのかという問いに対するニュートンの答えが「神の摂理」であった。つまり神が時々介入して恒星や惑星を適切な位置に止め置くからであると考えたのである²⁰。

このようなデカルトやニュートンなどこの時代の自然哲学者たちの営みを、「形而上」と「形而下」で分離することなど出来ないだろう。そしてそれはまた現代の科学にも重なる問題なのである。

「現代においても他の時代においても、科学を研究するためには無神論的—あるいは婉曲的な言い方では「懐疑論的」—視点が必要であるという考えは、科学そのものを一つの宗教にしたいと望む人々(通常自分たちを科学という宗教に奉じる高位聖職者と見なします)がつくりだした20世紀の神話です」(ローレンス・M・プリンチペ著前述書 p.53)

現代社会においても、自然科学における量子力学の発見は我々と自然との関係を大きく変えてしまっている。量子論によれば光子や電子といった存在は、粒子でありながら波動でもあり、すでに「存在」そのものが揺らいでしまっている。さらに量子力学には「観測問題」が含まれる。観測者が観測するという行為によって観測対象の「系」を変化させてしまうため、現象は観測者を含めて「現象」となる。そしてその現象は確率によって変動し一定しない²¹。このように科学が進んだ中であっても、むしろ進んだ科学の現代だからこそ、我々は科学と形而上的存在とを分離してはいけないのではないだろうか。

さてここで白石の西学観との関係に論を立ち戻そう。以上見てきたように、自然哲学を中心とする当時の西洋の学問が、キリスト教的形而上学と分離できないとするならば、白石の西学評の影響をどのように考えるべきなのだろうか。

もし自然科学として自然哲学の書が、そのままの内容で禁教下の日本に受容されたのだとすれば、その神に関する内容を含めて(或いはそれが見過ごされて)受容されたのであるから、白石評による分離がなくても日本に受容されたのであり、白石の西学評の後世への影響は見直されなければならない。

そしてもし自然哲学にキリスト教的なものが含まれているという理由で日本に受容されることがなく、白石評の影響により分断された形でのみ「自然科学」が受容されたのだとすれば、それは西学の中でも末端の細分化された情報・学問だけが日本に受容されたということであり、日本の蘭学の学問的価値及び日本に於ける「自然科学」の概念そのものに関わる問題となる。例えばニュートンやデカルトから神の存在を分離して、彼らの学術を受容したとするならば、それは果たしてニュートンやデカルトの学問を受容したと言えるのだろうか？しかしこの場合も禁教下の日本においては当然の受容のあり方であって、白石の西学観の影響は、西洋学術の受容の契機となったという動機付けと受容内容の規定といった消極的なものにとどまるだろう。

そして蘭学は功利的な日用技術にとどまり、おおよそ医学・天文学・世界情勢と地理の三つの方向を取ったとされる²²。ここから考えるなら、白石の西学観の影響は後者のものであると考えるのが妥当なのではないだろうか。

まとめにかえて

以上、「はじめに」で提起した問題を考察してきた。白石の西学観を表した『西洋紀聞』の一文は、従来考えられてきたような「形而上」＝「キリスト教」「形而下」＝「西洋学術」といった意味合いで捉えるべきかという点については、その文章の前後、及び白石自身の思惟様式から考えると、キリスト教と西洋学術を分離したというよりは、朱子学的普遍の延長上に西洋学術を位置づけるものだったと考えた方がよいのではないと思われる。

さらに「形而上」「形而下」のように西洋学術が分離できるものなのかという問題に関して言えば、当時の「科学革命」によって近代自然科学の萌芽ははじまるが、その学問像は「自然哲学」であって、神の存在を自然から読み取ろうとする学問であり、またその学問には神の存在が含まれていて、到底分離できるものではないと考えられていること、そしてそこから考えるならば、白石の西学観の影響はかなり限定的なものとなることを見てきた。

これらをまとめるならば、白石の評は「形而上」「形而下」の分離ではなく、自らの持つ朱子学的「形而上」「形而下」の連続性の思惟構造内での、キリスト教的連続性に対する優位の表明と考えるべきであり、朱子学的「形而上」「形而下」という連続性の延長上への西洋学術の位置づけだったと言えるだろう。また当時の朱子学や自然哲学という学問像から考えれば、白石にもシドッチにも互いにとっての「形而上」「形而下」を分離する考えはなかったと考えられる。それを分離と捉えるのは、鎖国禁教下という特殊状況によって生み出された視点であり、「自然科学」という呼称に慣れ親しんでいる現代の我々の視点でもある。

この連続性の延長上での西学の位置づけを「和魂洋才」であるとするのならば、白石の西学評を「和魂洋才」的先駆けとすることは妥当であると考えられる。しかしもし「和魂」「洋才」をそれぞれ分離した別個と捉えるならば、それは白石とは別のものと考えべきだろう。

最後に白石のように朱子学的理の普遍性の下に西洋学術をおくという様式の一つの例として、佐久間象山が見せる思惟様式があげられる。彼は「理」の普遍性の元に西洋学術をおき、その普遍性の中で西洋学術を理解しようとした。白石については既に見てきたが、佐久間象山については佐々木力氏による以下の指摘がなされている。象山は西洋学問に通じながらも、なお易学に執着していたが、その易学の執着に対して

「自らが重要と認める数理認識の基礎が朱子学の根幹たる易学的形而上学であるにしても、現実の数学的知識は、和漢洋いずれでもよいとする境域に達していた」（佐々木力氏「江戸のピュタゴラス主義 ー新井白石から佐久間象山までー」（下）（『思想』第1042号（岩波書店 2011

として、「朱子学の理と西洋科学の理とは根底において通じていると見なしていたのだろう」(同上 p.150)と指摘する。つまり象山は、西洋学術の形而上的側面を分離するのではなく、朱子学的な理に置換出来る部分をそのまま形而上において、西洋学術を理解しようとしていたと言うことが出来るのではないだろうか。

白石の西学観の影響を見るならば、象山に見られるような朱子学的普遍の中で西洋学術を位置づける思惟様式としての影響を見るべきなのではないかと思われる。

註

- 1 ジョバンニ・バッティスタ・シドッチ (Giovanni Battista Sidotti) のカタカナ表記は諸研究によって「シドチ」「シローテ」「シドッチ」等わかれるが、本稿では「シドッチ」で統一しておく。シドッチの呼称について、詳しくは宮崎道生著『新井白石の洋学と海外知識』(吉川弘文館 1973年3月)「〔附録〕ローマの使節シドチの潜入事情」の注(1)(p.233)を参照していただきたい。
- 2 『西洋紀聞』と『采覧異言』の内容の差異については前述の宮崎道生著『新井白石の洋学と海外知識』の第三章第一節「采覧異言と西洋紀聞との差異」に詳しい。
- 3 『西洋紀聞』の流布については宮崎道生校注の東洋文庫『新訂 西洋紀聞』(平凡社 1968年4月)の宮崎氏の解説の「四 伝承と流布」に詳しい。
- 4 以下本稿で引用した『西洋紀聞』の本文は、全て日本思想大系『新井白石』(岩波書店 1979年7月)所収のものを用い、思想大系本の頁数を附した。
- 5 例えば田村圓澄・黒田俊雄・相良亨・源了圓編『日本思想史の基礎知識』(有斐閣 1974年7月)の「新井白石の西洋理解」の項では「その教理の本格的検討を通じて西洋の文化的伝統におけるキリスト教(「形而上なるもの」と学術(「形而下なるもの」との異質性を指摘した白石の見解はとりわけ重要である」(p.416)としている。
- 6 但し白石がシドッチと会話し情報を得たのはこの四回の尋問だけではなく、恐らく以後も複数回にわたって切支丹屋敷を訪れ、シドッチから情報を得ていたと宮崎氏は指摘している。詳しくは宮崎氏の前述書『新井白石の洋学と海外知識』「第二章 新井白石における西洋学の進展」の「第二節 本格的西洋学への通路」(p.44-52)を参照していただきたい。
- 7 『西洋紀聞』の成書については、すでに宮崎氏前述書『新井白石の洋学と海外知識』「第四章 西洋紀聞の完成過程」で詳細な考察が行われているため、本稿ではそれを参考にまとめた。詳しくは宮崎氏の考察を参照していただきたい。
- 8 シドッチの人物と献身的な使命感に対して、白石が深く感銘を受け、その同情からなるだけ温情をもった処遇を建議したであろうことは、前述の宮崎道生編『新井白石の現代的考察』所収のアレッサンドロ・ヴァロータ氏「新井白石の『西洋紀聞』について」(p.261-262)に詳しい。
- 9 シドッチ死去の直接の死因については諸説ある。前述の宮崎道生著『新井白石の洋学と海外知識』「〔附録〕ローマの使節シドチの潜入事情」の注(32)に詳しい。また2014年7月文京区の切支丹屋敷跡から三基の墓が発見され、そのうち1つの人骨がミトコンドリアDNA分析の結果、トスカーナ地方のイタリア人グループの人骨であり、また中年男性、身長170cm以上であることがわかった。切支丹屋敷に収容されたイタリア人はシドッチとキアラの二名であり、キアラは火葬されたことがわかっているため、人骨はシドッチのものである可能性が非常に高いとされる。またこのシドッチと目される人物は伸身の形で土葬されており、或いはキリスト教式に則った形での埋葬がなされたのかもしれないという指摘がなされている。詳しくは「カトリック新聞オンライン」(2016年4月7日)
(<http://www.cathoshin.com/news/sidotti-remains/10974>) 配信記事内に詳しい。

- 10 年表を作成するにあたって前述の宮崎道生校注の東洋文庫『新訂 西洋紀聞』所収の「新井白石関係略年表」、同じく前述の宮崎道生編『新井白石の現代的考察』所収の飯田瑞穂氏「新井白石年譜」、及び栗田元次著『新井白石の文治政治』(石崎書店 1952年12月)の「四 伴天連シドッチの訊問」(p.299-321)を参考にした。
- 11 この白石のキリスト教批判は、前述の源了圓著『徳川合理思想の系譜』(p.61-63)にまとめられたものを参考にした。また白石のキリスト教批判については前述のヴァロータ氏「新井白石の『西洋紀聞』について」(p.264-266)、同じく前述宮崎道生校注の東洋文庫『新訂 西洋紀聞』「解説」(p.447-449)にも詳しい。
- 12 白石はシドッチとの尋問に備えて広く排耶蘇書を読んでおり、その影響を受けていると考えられることが宮崎氏によって指摘されている。白石が参考にした排耶蘇書として、不干ハビアン『破提字子』林羅山『排耶蘇』雪窓『対治邪執論』熊沢蕃山『集義和書』ならびに明の鐘始声『闢邪集』などがあげられている。詳しくは(注11)で挙げた宮崎氏の「解説」を参照のこと。また岡本三右衛門(ジュゼッペ・キアラ(Giuseppe Chiara1602-1685)シドッチ以前に日本に潜入し捕らえられ、後転んだイタリア人宣教師)の三書についてはたびたび『西洋紀聞』内で触れられているが現在所在不明である。岡本については宮崎氏校注の東洋文庫『新訂 西洋紀聞』の(注十二)と(注七十五)に詳しい。
- 13 「與聞」の用例は『論語』子路篇などにみられる。「関わり知る」「参画して聞き及ぶ」などと訳される。また十七条の憲法にも用例がある。
- 14 シドッチが学んだ教科については前述の栗田元次著『新井白石の文治政治』の「四 伴天連シドッチの訊問」(p.315-316)、及び前述宮崎道生著『新井白石の洋学と海外知識』「〔附録〕ローマの使節シドッチの潜入事情」の注(4)に詳しい。両者とも「メタヒイジカ」を形而上学と解釈している。
- 15 「形而上」を「道」と考えるならば、この一文の前文である「其教法を説くに至ては、一言の道にちかき所もあらず」の「道」とも考え合わせるべきではないだろうか。
- 16 殆どの先行研究は「所謂形而下なるもののみを知りて、形而上なるものはいまだあづかり聞かず」までしか引用せず、後文の「さらば天地のごときも、これを造るものありといふ事、怪しむにはたらず」まで及ばない。管見の及ぶ限りでは佐々木力氏「江戸のピュタゴラス主義 —新井白石から佐久間象山まで—」(下)(『思想』第1042号(岩波書店 2011年2月))のp.158の引用のみであった。
- 17 前述の佐々木力氏「江戸のピュタゴラス主義 —新井白石から佐久間象山まで—」(下)では、白石の西洋学評を最後まで引用した上で「西洋の学問なんぞは、所詮、形而下の事だけに詳細を極め、形而上の事については、傾聴すべき所見などはない、天地を創造した存在などといっている始末ではないか、というのである。たしかに、白石の無知のなせる業と評することができるかもしれないが、あながち、そうとばかりは言えない、朱子学者の自信の如きものも見え隠れしている」(p.158)とする。
- 18 前述の佐々木氏論文で、氏は江戸時代において白石から佐久間象山まで「人間の数理認識が、朱子学の易学的形而上学の基礎の上で理解され、立派に正統的位置づけを与えられていた事実は留目されなければならない」(同上)とする。また源了圓氏は前述『徳川合理思想の系譜』の中で「朱子学の全てが古学の中に吸収されたのでもない。朱子学は朱子学として存続しつつ、その窮理の経験的合理主義化はますます進められた。洋学が受容され、その経験的合理主義の精神が理解されるにつれ、儒教文化における近代科学受容の媒体は理でなければならぬという自覚はかえって深まったのである」(p.49)と述べる。
- 19 「科学革命」については村上陽一郎著『近代科学と聖俗革命〈新版〉』(新曜社 2002年7月) p.18に詳しい。
- 20 このニュートンの仮説はライプニッツによって批判されている。ニュートンの神は、最初の段階からキチンと機能する宇宙を創造しなかったために、修理したり掃除したりするヘボな職人のようだ、と。ここには神の全能の問題があるが、しかし神が完璧な世界を創造し、その設定に従って世界が動いているとしてしまうと、今度は神は天地創造の時にだけ働いて、あとはこの世界から退場してしまい、神の世界への介入を否定する機械論的自然観へと繋がる。しかしその意味で言うならば、我々が「合理主義」

「非合理主義」とする区別は、最初だけ神が働いたとするか、常に神が介在するかの違いであって、神の存在を措定することに違いはないことになる。初期の自然哲学者が機械論的自然観の中でいかに神学的主張を守ろうとしたかについて、精しくは前述の J・H・ブルック著・田中靖夫訳『科学と宗教 合理的自然観のパラドクス』の「第4章 機械論的な宇宙における神の活動」(p.132-168)を参照していただきたい。

- 21 量子力学と神との関係、新しい自然哲学の模索について、詳しくはトーマス・ディクソン著・中村圭志訳『科学と宗教』(丸善出版 2013年9月)の「第3章 神は自然に働きかけるか？」に詳しく述べられている。
- 22 例えば田村圓澄・黒田俊雄・相良亨・源了圓編『日本思想史の基礎知識』(有斐閣 1974年7月)の「洋学と西洋文化の受容」を参照のこと。

キーワード：新井白石、西洋紀聞、西学観、自然哲学